

**岩波茂雄**

(1回) 1881~1946

出版人 岩波書店創設、貴族院議員、文化勲章受章。

岩波文庫、岩波新書、広辞苑など発刊。

無名の研究者への研究費寄付のため風樹会を設立。

新田次郎

(本名: 藤原寛人・31回)

1912~1980

気象庁に勤める傍ら、
作家として活躍。
著書「孤高の人」、
「八甲田山死の彷徨」
「強力伝」、「武田信玄」、
「霧の子孫たち」など多数。

清水多嘉示

(17回) 1897~1981 彫刻家

仏近代彫刻の巨匠ブルデルに師事。

作品127点を故郷原村に寄贈し
八つ岳美術館を創設。

「みどりのリズム」、「男の立像」他。

日展顧問、武藏野美大名誉教授、
文化功労者。**第6号**

編集・発行

東京清陵会

(諏訪清陵高等学校)

同窓会東京支部

事務局

〒270-11

我孫子市白山2-15-2

林尚孝方

TEL 0471-83-2726

中川紀元 (13回) 1892~1972画家 マチスに師事、フォーヴィズムを
わが国に移入、二回会を結成。

芸術院恩賜賞受賞、作品「読書の女」、

「伊那の谷」他。

著書「マチスの人と芸術」、

「ピカソと立体派」他。

1995年度 東京清陵会定期総会案内

1. 日 時 平成7年9月13日(水)午後6時
 1. 場 所 虎ノ門パストラル(新館1階鳳凰の間)
 港区虎ノ門4-1-1 (03-3432-7261)
 (地下鉄日比谷線神谷町駅4番出口下車2分
 地下鉄銀座線虎ノ門駅下車8分)
1. 議 事
 (1) 1994年度会務・決算報告
 (2) 1995年度事業計画・予算案 (3) その他
1. 懇親会
 1. 会 費 7000円

当日は、前田由美子氏(旧姓小平・62回生)他3名による琴合奏およびSBC製作ビデオ“あ、博浪の槌とりて”的放映を予定しております。また、創立100周年記念の特製テレホンカードを、記念品として用意しております。

(当番幹事62回生、次期当番幹事63回生、サブ幹事72・82回生)
 会場が変わりましたのでご注意下さい。

ご面倒ですが、ご出席・ご欠席どちらの場合も、同封の返信用ハガキに必要事項をご記入の上、9月3日までに到着するようご返送下さい。

「三冊の人名簿を流れるもの」



小平 祐（四二回）

私の手元に「新潮日本人名辞典」「読売年鑑人名録」「清陵同窓会名簿」の三冊の人名簿がある。各自に清陵百年の歴史を物語ついて面白い。

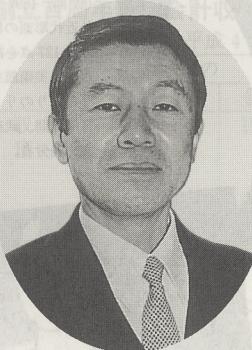
「新潮日本人名辞典'91」を開くと、岩波茂雄（一）、片倉兼太郎（四）等の実業家。茅野蕭々（三）、藤原咲平（四）、今井登志喜（六）、長田新（七）、藤森栄一（三〇）等の学者。藤森成吉（一）、新田次郎（三一）、阿木翁助（三二）等の作家。中川紀元（一二三）、武井武雄（一四）、清水多嘉示（一七）等の美術家等、錚々たる顔触れが並ぶ。この人々は主に清陵百年の前半にあって、日本の百年を築かれた。眞に輝かしい足跡である。

「読売年鑑人名録'95」を開くと、藤森鉄雄（三八）、河西計介（四二）、横川端（五一）、横川紀夫（六二）等の実業家。小松雅雄（三八）、北原文雄（三八）、飯島宗一（四一）、増澤謙太郎（四一）、小口高（四八）、富坂広作（五〇）等の

学者。武川忠一（三八）、木之下晃（五八）、藤森照信（六八）等の諸大家等身近な顔触れが並ぶ。この人々は主に清陵百年の後半にあって、現代の日本を背負っている。眞に目覚ましい活躍ぶりである。

第三の人名簿「諏訪清陵同窓会名簿'92」を開くと、二万人の諏訪中学、清陵高校、東京清陵会の優秀な顔触れが並ぶ。この人々が清陵百年を貫いてスクラムを組み、清陵と日本の歴史を拓いてきたのである。

ここには級友の名も第一頁にある。正に友人知己の森であり、市販の前二冊を凌ぐ価値がある。眞に誇らしい集団の軌跡である。



「生徒・父母・地域の願いに応える学校づくりを」

校長 松下 勲（五九回）

入生歓迎会などの諸行事も滞りなく終了し、百一年目の新たな年度がスタートいたしました。対面式などは、かつての蛮カラさは影を潜め、一〇年前は三割に満たなかつた女子生徒の割合も本年度は四割を超えて、時代の流れを改めて感じさせられました。

ご存じのように戦後五〇年、情報化、国際化、高齢化、少子化などの進行と社会の成熟化の中で、「教育が人を選ぶ時代」から「人が教育を選ぶ時代」を迎えております。

そして今、若者たちは、急速に変化する社会の中で、氾濫する様々な情報は感銘を受けた。又長田新先輩の、明治期の諏中生の話、大正期のドイツ留学の話は面白かった。岩波の国語十卷は諸々の諏訪の心を交わす素晴らしい場であった。卷一の「生きた言葉」か

トンを託された様に思つ。我々はこの頁にあつた世阿弥の「初心不可忘、時々初心不可忘、老而初心不可忘」はその後の人生の指針となり、命には終わることあり、能には果てあるべからず」は私の永遠の課題となつてゐる。今思つと、あの岩波国語は岩波茂雄先輩が、我々後輩に贈られた言葉の花束であり、茅野蕭々、長田新先輩もあの時、我々の世代に諏訪の心というバ

校と東京清陵会の新しい時を創り出す出発点になるものと期待している。清陵百年の節目にあつて、今年が母の時、我々の世代に諏訪の心といふ感してゐる。

清陵百年の節目にあつて、今年が母の時、我々の世代に諏訪の心といふ感してゐる。

トンを託された様に思つ。我々はこの頁にあつた世阿弥の「初心不可忘、時々初心不可忘、老而初心不可忘」はその後の人生の指針となり、命には終わることあり、能には果てあるべからず」は私の永遠の課題となつてゐる。今思つと、あの岩波国語は岩波茂雄先輩が、我々後輩に贈られた言葉の花束であり、茅野蕭々、長田新先輩もあの時、我々の世代に諏訪の心といふ感してゐる。

トンを託された様に思つ。我々はこの頁にあつた世阿弥の「初心不可忘、時々初心不可忘、老而初心不可忘」はその後の人生の指針となり、命には終わることあり、能には果てあるべからず」は私の永遠の課題となつてゐる。今思つと、あの岩波国語は岩波茂雄先輩が、我々後輩に贈られた言葉の花束であり、茅野蕭々、長田新先輩もあの時、我々の世代に諏訪の心といふ感してゐる。

トンを託された様に思つ。我々はこの頁にあつた世阿弥の「初心不可忘、時々初心不可忘、老而初心不可忘」はその後の人生の指針となり、命には終わることあり、能には果てあるべからず」は私の永遠の課題となつてゐる。今思つと、あの岩波国語は岩波茂雄先輩が、我々後輩に贈られた言葉の花束であり、茅野蕭々、長田新先輩もあの時、我々の世代に諏訪の心といふ感してゐる。

トンを託された様に思つ。我々はこの頁にあつた世阿弥の「初心不可忘、時々初心不可忘、老而初心不可忘」はその後の人生の指針となり、命には終わることあり、能には果てあるべからず」は私の永遠の課題となつてゐる。今思つと、あの岩波国語は岩波茂雄先輩が、我々後輩に贈られた言葉の花束であり、茅野蕭々、長田新先輩もあの時、我々の世代に諏訪の心といふ感してゐる。

清陵高校創立一〇〇周年を讃える

小幡勇三郎(二二一回)

母校清陵高校が、創立一〇〇周年の記念すべき年を迎えた。心からお出でうございますと申し上げます。

これは大きな節目の年である。五〇年、六〇年、或いは七〇年、八〇年と言うのも、もちろん節目であるが、一〇〇周年というのは極めて大きな節目である。この大きな節目の年、清陵高校創立一〇〇周年の四月に、入学された第一〇〇回生の諸君の前途は、誠に明るく、洋々たるものがある。将来の飛躍と発展が期待される。

人間の百歳は真に長寿であり、お祝いの言葉も多く寄せられるが、実質的な力量は必ずしも賞賛に値しないことが多い。人生には定年があり、その後更に長寿を保つたとしても、定年前に比べれば、実力は劣っているであろう。ところが学校のような組織や団体は、一〇〇周年に達すれば、益々盛大な活動を發揮し、社会的に偉大な存在となる。そして更に大きな発展を遂げ、飛躍するものである。私は二三回生であるから、第一〇〇回生の若き諸君から見ると、約八〇年の昔入学した者であり、若き日の活力を取り戻すことは出来ない。昔、平清盛が傾く夕陽を招いたという伝説があり、我々もそのような想いに駆られることはあるが、流石の清盛も夕陽を呼び戻す事は出来ず世を去つたと言ふ。我々も若き日を一度

繰り返すことはできない。何か物事をやろうとすれば若い力が必要だ。

一〇〇周年の記念すべき年に当たる清陵高校に入学された諸君は、必ずや何かを成し遂げようという決意をされたと思う。青春は彗星の如く過ぎて行く。機会は二度とない。大宇宙を遊泳するもよい、大地も走れ、絵を画くもよし、若き力を十分に發揮しうる機会を逸することなく、為し遂げんとする目標に向かって突進して貰いたい。そしてそれを成就することは可能である。清陵高校は一〇〇周年を契機として、更に発展するであろう。高校の発展は、在校する諸君の発展と決意にあり得ない。清陵高校一〇〇周年を更に発展せしめることは、正に諸君の決意と、その目標の実現に対する努力にかかっているのである。

「うけいさま（鵜飼先生）」は歴史の担任で、見るからに温厚で包容力のある老先生であった。先生については次

の様な話が語り伝えられていた。ある生徒が先生のお宅にうかがつた。先生の部屋に通され、何に来たのかと先生に尋ねられた。彼が遊びに来ましたと答えると「そうか、じゃあ、そこで遊

が、仕事はTOKYO GHQを相手とする臨時渉外部に勤めていた。そもそも同窓会に開わりを持ったのは、勧業銀行が一枚加わったユニオンクレジット（UC）の創設事務所に、小口積

田劉生の弟子となり、後には一水会の会員として活躍された。

我々が三年生のとき初めて油絵を採用されたり、また外国版の画集で中世から印象派に至る西欧の画を紹介して下さつたりした。時にはお宅に伺うと

我当时の田舎には珍しいショパンの前奏曲や円舞曲のコルトーの演奏のレコードを聞かせていただけたりした。

小学校の教科でベートーベンの月光の曲のエピソードを習つてもそれがどんな曲か知らない我々にとって大変な驚きだった。先生のこうした西欧芸術の紹介が老後の生活の大きなゆとりになつているように思つ。

大手町のUCの創立事務所（朝日生命ビル）に訪れて来て、同窓会の仕事を手伝つてくれと頼まれたからである。

そのことを私の岳父小平省三（三和銀行常務営業部長）に伝えると、岳父は中学の同窓会が発展しないのは古くからあった諏訪郷友会があるからで、賢

一君は余程努力をしないと諏中同窓会が発展しないだろうと言つた。よく調べてみると、諏訪郷友会は長善館とい

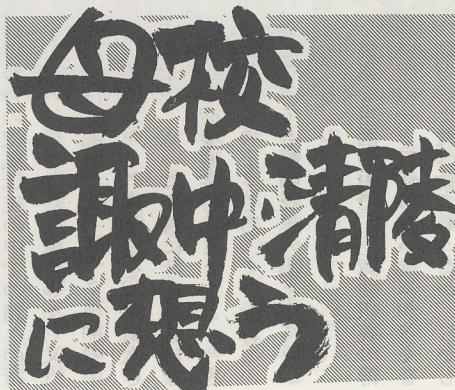
う実体財産を経営する財團法人であつて、メンバーは諏訪中学生とほとんど同じである。石井睦藏君に勧められて僕は長善館にご厄介になつた。僕は諏訪中同窓会と両者友好状況を保つよう

に配慮した。岳父の小平省三は郷友会の理事長をやつていた。UCの設立事務は私が専務として忙しかつたので何はともあれ引き受けざるを得なかつた。（今残つてゐるUCのテントウ虫が付いたマークは僕の発案である。）

諏訪中学の同窓会は当初は同窓会

三先生の思い出

久保田 力(三二一回)



三月に諏訪中学校（清陵高等学校）を卒業して以来既に六四年の歳月が経過している。現在の清陵を訪れてもそこに

は我々の中学生時代に結びつくものは殆どない。心に浮かぶものはその時に暗記して、試験の答案には問題に関係なく暗記した一ページを書いておいた

教ええて下さつた諸先生のことである。

個性豊かな先生方に恵まれて、その後の人間性の形成に貢献した。

方を代表して次の三先生についての思

同窓会こと始め

尾澤 賢一(三七七回)

僕がこの原稿を書くのは、そもそも中学で同期生であつた飯島重孝君（三鷹の天文台長をやつた）から私に電話があり、あの太陽の黒点観測で有名だ

三沢先生は太陽の黒点観測で有名だったが我々は地理を習つた。先生の講義は教科書にあるようなものではなか

った。陸地測量部の地図の水田と桑畑を絵の具で塗り分けて地形と産業の

期生の依頼されて何事によらず引き受

けざるを得なかつた。中学の同期生に

本部を中学校に置き、東京の会員は昔

り、小鮎を釣った湖は緑色に変わった。混住化も進んだ。連続テレビドラマ「かりん」のロケ現場探しの苦労話を領けた。諏訪に根を持たない会員の心には、八ヶ岳や諏訪湖に代表される諏訪といふ大景観と師・先輩・友との絆しか残されていない。利便性と経済性を求めて変貌した故郷や学舎を追憶する団体もまた時の経過とともに、前へ、奥へと座を移して行くだろう。が、皆の衆は意気軒昂、また踏ん張れるつもりでいるようである。

母校とN.M.会

弓削 純一（五七回生）

私が生涯誇りにしている長野県立の名門・諏訪清陵高校の第五七回生として入学を許可されたのは昭和二六年の春、八学級編成、二六七名内女子六名（前年初めて女子一四名入学）でした。

旧制中学の先輩から有り難く譲り受けた梶の葉の校章付学生帽を被り、黒サージの詰め襟学生服に校章入りのボタンを付け替え、腰に日本手拭いをぶら下げ、布製肩掛鞄をバカバカいわせながら、太い鼻緒の高下駄を鳴らし、高校生としての氣概と希望に燃える胸を張つて清水ヶ丘へ通学したものです。

六月一日の衣替えは、小倉の霧降学生服、学帽には白カバーを掛けるのが習慣で、頭髪は坊主か三分刈り、長髪は三年生夏休み以降しか許されませんで、許可された映画鑑賞時でも、秘かに英単語帳をめくる学友もあり、当

風は、今日の服装自由、TV人間、受験オーナリーの生徒の比ではなかつたとあります。

今、目を瞑ると、校庭の大石と桜花、百葉箱の白さ、くすんだ木造旧校舎に破れた窓ガラス、煙出し薪ストーブ、生徒会後の体育場床溝の埃の列、教員室の股火鉢を開んで教師と語つた人

を意識しての端艇漕ぎや泳いだ湖の碧

さ、校庭から眺める守屋山や北アルプスの遠望の雪、ファイアート・ストームの校庭の煙を母校の火事と思い駆け登ってきた叔父達、学期末の成績が悪くて主任に呼び出されて冷や汗をかいた事などが鮮明に瞼に浮かび、回想の渦に引き込まれてしまいます。難解な校歌をやつと理解できる年齢に達した五七回生は、部活で共に汗した学友を中心にして、入会を許可されたのは昭和二六年の春、八学級編成、二六七名内女子六名（前年初めて女子一四名入学）でした。旧制中学の先輩から有り難く譲り受けた梶の葉の校章付学生帽を被り、黒サージの詰め襟学生服に校章入りのボタンを付け替え、腰に日本手拭いをぶら下げ、布製肩掛鞄をバカバカいわせながら、太い鼻緒の高下駄を鳴らし、高校生としての気概と希望に燃える胸を張つて清水ヶ丘へ通学したものです。

六月一日の衣替えは、小倉の霧降学生服、学帽には白カバーを掛けるのが習

慣で、頭髪は坊主か三分刈り、長髪は三年生夏休み以降しか許されませんで、許可された映画鑑賞時でも、秘

かに英単語帳をめくる学友もあり、当

い出しながら、母校に馳せ参じる旧友の顔の変貌ぶりを楽しく想像しているところです。

「高悟帰俗」のこと

—半世紀なお脈打つ理念の系譜

矢島 重巻（五一回）

諏訪清陵高校で長年教鞭を執られた牛山之雄先生が平成六年秋の叙勲で勲四等瑞宝章を授与され、その年の一月二三日諏訪市のホテルで祝賀会が開かれた。

友人知己をはじめ、かつての教え子たち七〇人が出席、私も東京から駆けつけた。予定したお祝いのあいさつが終わると、幹事指名で同期の林尚孝、青木博国両君と私が登壇し、即席のスピーチをしたが、その中で私と林君が期せずして「高悟帰俗」に触れ、私は先生の教示されたこの理念が内面生活の重要な指針となってきたという趣旨の話をした。加えて林君までこれに言及したことで半世紀を経てなお脈打つ理念の確かな存在感を確かめることができ、新鮮な驚きを覚えた。

私が「高悟帰俗」という言葉を初めて知ったのは、昭和二年一二月二〇日の一例だし、田中道哲君（五五回）は日発行の文学部誌「清水丘文学」第二号によつてである。東京文理科大学卒業して着任したばかりの新進の国語教諭、牛山之雄先生がズバリ「高悟帰俗」を題名に、芭蕉を日本文学の底流ととらえる論究を寄稿したのだ。旧制諏訪中学（後の諏訪清陵高校）一年生の私は、なかなかに難解な文章だつたけれど、題名の知的衝撃は強烈だつた。

書架に多数の文学・専門書を丁寧に納めた二階の書斎。同期米倉巖君の著作も見える。和服姿の先生は横浜の息宅から戻つて来たばかりだと言われ、いたつて元気な様子。早速に本題に入る。清陵時代を思い起こす明快な語り口で「講話」が始まつた。

「高悟帰俗」の出典は「芭蕉の門人・土芳著『三冊子（さんぞうし）』」。芭蕉の教えや発言・意見をまとめた、いわば芭蕉語録で、芭蕉の俳諧論書でもある。三部作より成り、そのうちの「あかそうし」に「高く心を悟りて俗に帰るべしとの教也。つねに風雅の誠を責め悟りて、今なす處の俳諧にかへるべしと云へる也」とあり、芭蕉は自己の

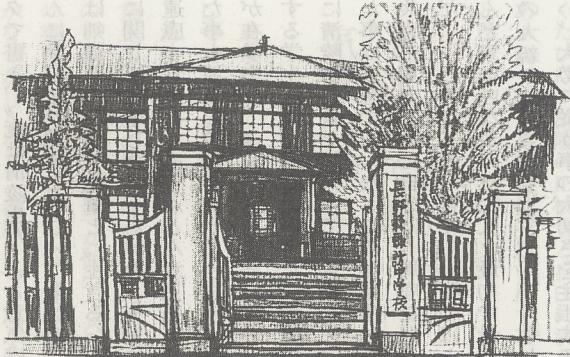
つたようだ。前記林君のスピーチはその一例だし、田中道哲君（五五回）は

心を高く悟つて日常卑近の世界を詠（よむのが俳諧の根本だと教えた。先生はこれを芭蕉俳諧論の根本理念とらえ、内容をつづめて「高悟帰俗」の

成句にしたという。

理念をさらに突き詰めると、日常の世俗的な所作に一つの哲学を貫徹させしとの考え方にもなり、教育の原理に通じるというのが先生の説明だ。

普遍的な理念たりうる所以（ゆえん）でもある。



た。一見分かりやすく対照の妙を得た四字成句の魅力に取り付かれた。その後、清陵を卒業し上京してもこそ、俗事ばかりを追いかける報道関係の仕事をしたことが、余計にそうさせたのかもしれない。それ忘れることはなく、いつのまにか念願を持つていた。今度の祝賀会はそのチャンスであつたけれど、時間がなく持ち越しとなり、ことし平成七年五月になつて、諏訪市の自宅に先生を開かれた。

先生から直接教えてもらいたいという想い持つていた。今度の祝賀会はそのまま勝手に解説を下している感じがないでもない。私自身、いつの日か直接教えてもらいたいといつた。二見分かりやすく対照の妙を得た四字成句の魅力に取り付かれた。せつてみるレベルに昇華させていた。言つてみれば俗事ばかりを追いかける報道関係の仕事をしたことが、余計にそうさせたのかもしれない。それ忘れることはなく、いつのまにか念願を持つていた。今度の祝賀会はそのチャンスであつたけれど、時間がなく持ち越しとなり、ことし平成七年五月になつて、諏訪市の自宅に先生を開かれた。

先生から直接教えてもらいたいといつた。二見分かりやすく対照の妙を得た四字成句の魅力に取り付かれた。それが勝手に解説を下している感じがないでもない。私自身、いつの日か直接教えてもらいたいといつた。二見分かりやすく対照の妙を得た四字成句の魅力に取り付かれた。せつてみるレベルに昇華させていた。言つてみれば俗事ばかりを追いかける報道関係の仕事をしたことが、余計にそうさせたのかもしれない。それ忘れることはなく、いつのまにか念願を持つていた。今度の祝賀会はそのチャンスであつたけれど、時間がなく持ち越しとなり、ことし平成七年五月になつて、諏訪市の自宅に先生を開かれた。

先生が芭蕉のこの言葉に巡り会ったのは、大学一二三年のころ。能と俳諧の研究で名高い能勢朝次先生に師事し、芭蕉を考究するうちに「芭蕉こそこの国最大の文学者」と位置づけ、その根本理念として「高悟帰俗」を見いだした」と述べられた。

講話は二時間余りに及び、久々に学生気分に戻った気持ち。祝賀会で夫人と一緒に壇上に立ち「書くことが生きること」とあいさつされた先生の姿に理念実践者をほうふさせたことを思い出し、胸中ひそかに「高悟帰俗」の原点に立ち帰る決意を新たにして辞したのであった。

“校歌に生きる”

堀内
直（六四回）

「清陵出てから二〇年……」と高校時代に声高らかに歌っていた時は、二〇年はずつと遠い先の日と思っていた。ふと気が付いてみると、もう三五年もたつてしまつた。しかし、青春時代の思い出は不思議なものである。昨日の事さえ忘れがちな今日この頃であるのに、機会を得ればずつと新鮮にまた熱く胸に湧き上がってくるからである。

人生半ばを過ぎた者のノスタルジアと言わればそれまでだが、青春時代に思い切り燃焼できたからこそ思い出が強烈であると都合よく解釈したりしている。(我が子も最早当時の私の年齢に達してしまつた。それを見てか、はたまた私が年寄りの目で見すぎなのかな判らないが、今の高校生には当時の情熱がなんとなく欠けているような気が

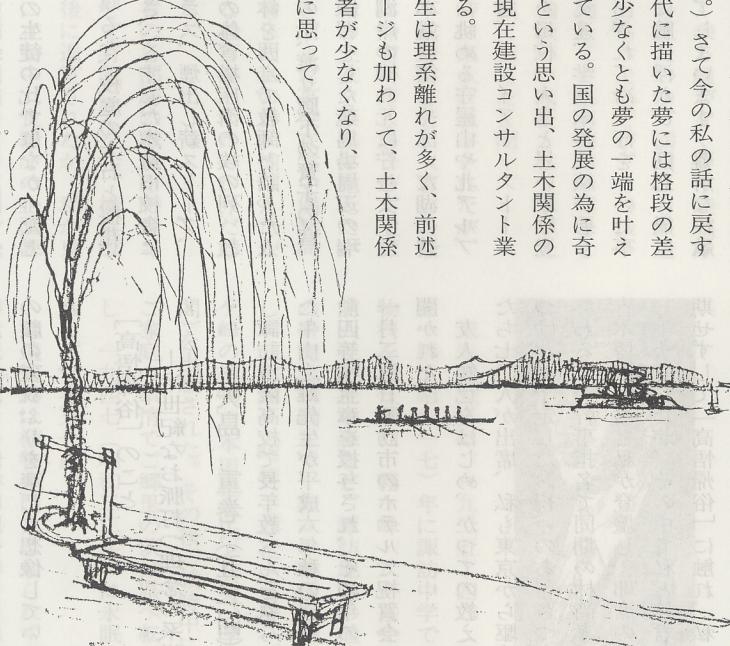
してならない。)

当時の私達は、日本が戦後の貧しさから脱し、ようやく高度成長期に移行する時代であったから、テレビや冷蔵庫を初めてして、目に映る文明の利器の発達は素晴らしい感じられた。また

国の大發展や、経済の成長に自分の将来を重ね合わせ、無限の夢も描いていた。それも小学校入学時代の貧しさを経験しているからこそ、違いが判り発展の喜びを感じたと思う。(息子達には口癖のように、贅沢さを指摘し、地球上の他の国の子供たちの話をしたり、歴史的に永遠に栄えた国がないことを話すが、全く関心を示さない。豊かな時代に生まれ育つた彼等には無理からぬ事と思いつつも、日本の将来を憂いたり

もしている。)さて今の私の話に戻すと、学生時代に描いた夢には格段の差はあるが、少なくとも夢の一端を叶えるべく生きている。國の發展の為に奇与出来たらという思い出、土木関係の道に進み、現在建設コンサルタント業を営んでいる。

近頃の学生は理系離れが多く、前述の悪いイメージも加わって、土木関係を目指す若者が少なくなり、非常に残念に思っています。



母校清陵は伝統的に理数系が強く、

それが誇りでもありました。一〇〇年

湯沢
秀昭（七四回）
「水清無魚」に気づき

を迎えたこの機会に、一人でも多くの後輩がこの事に目を向け、この仕事を

生きて行く志を立ててくれたら大変に

幸せに思います。

私は広い土木工学の中で「水」を中心にして設計をして参りました。これ

も端艇部で諏訪湖を漕ぎ回った縁でし

ょうか。諏訪湖の汚れが酷く、その早

期解決の為の下水処理場の建設に加わ

りました。今でも、立派な先生、先輩、

友人に恵まれた母校に深謝し、「理想の

華の咲かむまで」と歌いながら生きて

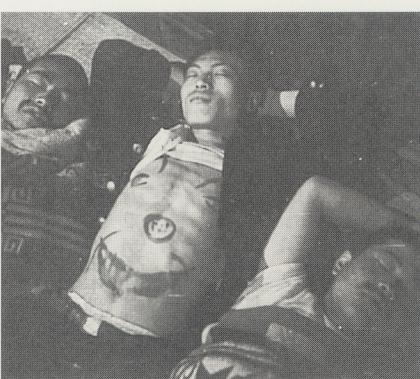
いる私です。

の重要な書籍として「あさひの恋習

友人の巻本さはえの懸念の因面主音

書けた「諏訪湖」に感動す

る重要な書籍として「あさひの恋習



を経営し華々しく躍進している話を聞いたのもこのころであった。会社に入つてから先輩、上司との意義のくいちがいから何回か辞表を書き、結局は退社した。社会にてから現在にいたるまでの障害を乗り越えてこられたのは、清陵の校風に学ぶ事が多かつたと思う。

人生半ばにして最近とみに思う事が清陵の先輩が数人いて若き命を失った事は残念であった。この学生運動に共感を覚えていた自分は「馬鹿な奴らだ！」との亡父の一言で、出張でほどんど家にいなかつた亡父と最初で最後の大親子喧嘩をした事も記憶に新しい。大勢に従う事の大切さを主張する父と、大勢に妥協する事に反発する私は平行線を辿つた。

新聞奨学生として大学に進み、外資系の医療機器商社に二年半ほど勤務し、七年前に独立し、現在は二〇人ほどの医療機器商社「株式会社ハートラ」を経営している。社会に出て矛盾にぶつかり、世の中の汚さも見せつけられた。又、先輩が「スカイラーク」

想 信

明治初期長野県は日本一の教育県。現下の狂乱世相に愛する清陵よ、時代に即応する人材育成に努力される事を。

古山 主一郎(19回) 上 講 訪
目下諏訪と東洋各地との考古学的関連について勉強中。清陵高校でも此のようない研究をしているグループありや。

太田 敏三(21回) 上 講 訪
大正八年三月高等学校へ入学のため第四学年を修了して退学しました。

片倉 五郎(21回) 旧川岸村
私は旧川岸村の為、岡谷駅へ三キロの道を四年間往復した。九十歳の今日尚健在の理由かと感謝しております。

三澤 泰太郎(24回) 講 訪 市
終生忘れ得ぬものは師の恩。諏訪中在学校中今も心に残るのは、和服姿で漢文講義の菊池先生と国語講義の河西先生

吉先輩が探して見え、学士院賞を受けてくれました。諏中の有難さでした。

柴田 正象(18回) 講 訪 市
明治初期長野県は日本一の教育県。現下の狂乱世相に愛する清陵よ、時代に即応する人材育成に努力される事を。

古山 主一郎(19回) 上 講 訪
目下諏訪と東洋各地との考古学的関連について勉強中。清陵高校でも此のようない研究をしているグループありや。

太田 敏三(21回) 上 講 訪
大正八年三月高等学校へ入学のため第四学年を修了して退学しました。

片倉 五郎(21回) 旧川岸村
私は旧川岸村の為、岡谷駅へ三キロの道を四年間往復した。九十歳の今日尚健在の理由かと感謝しております。

三澤 泰太郎(24回) 講 訪 市
終生忘れ得ぬものは師の恩。諏訪中学校中今も心に残るのは、和服姿で漢文講義の菊池先生と国語講義の河西先生

吉先輩が探して見え、学士院賞を受けてくれました。諏中の有難さでした。

小尾 扃雄(28回) 上 講 訪
誇り高き母校。昭和三十年代頃母校を訪ねたら、校長がこの生徒は黙つて勉強すると言つた事も忘れられない。

藤森 作二(29回) 講 訪 市
私は地域のシルバー人材センター会長として世界に例のないこの団体の中で高齢化社会のため頑張つて居ります。

有賀 槐三(30回) 講 訪 市
ふるさとの最大の思い出は在学中春秋はボート、夏は水泳、冬はスケートと四季折々に諏訪湖に親しんだ事である。

三井 炳友(30回) 富士見町
昭和医大創立を応援していいた頃の小沢秋成先生の筆が絵入りの葉書出現。今から六十余年前のものがああ三井炳友

阿木 翁助(31回) 下 講 訪
私は東京の多摩永山に住む。隣接して諏訪團地がある。そこには諏訪中学があるのだ。この諏訪が私の終の住处。

小坂 敬直(40回) 上 講 訪
清水が丘の健児として、今は「清水が丘」の住人と、母校との奇縁を喜ぶ生活。戦後五十年、母校百周年。万歳想史研究」は中腹に達し前途きびしく

伊東 一夫(34回) 下 講 訪
よわい八十の坂にさしかかり「文芸思想研究」は中腹に達し前途きびしく

金子 金治郎(26回) 中 洲
学生会館のサロンで休憩の時、武居三吉先輩が探して見え、学士院賞を受けてくれました。諏中の有難さでした。

植松 健悟(35回) 下 講 訪
諏訪中四年間の下諏訪からの徒步通学

小橋 久男(40回) 講 訪 市
はるかななるも、この道を私は辿るなり

土橋 久男(40回) 講 訪 市
昨春会報に「清陵と海軍」を投稿し、今日米摩擦の報しきりの時、宿敵米国

宮坂 秀彦(47回) 上 講 訪
人生。残生暫し、余韻を惜しまん。

柳沢 武康(41回) 上 講 訪
疲弊と繁栄、戦争と平和、飢餓と飽食、数世代を凝縮せしが如き我世代の

日野 魁(37回) 講 訪 市
卒業して五九年。級友がなつかしく、会うことが楽しみだ。でももう会えない友も多くなり、感慨一しおである。

北原 文雄(38回) 高遠町
諏中の心が清陵と共に存続し「千万人と雖も我往かん」が生き続けていると、若人への希望を托しております。

村上 利雄(39回) 下 講 訪
東京清陵会は大変うまく運営され楽しい会になりました。小平会長、林事務局長ら皆さんに感謝のエールを。

藤森 一平(43回) 四 賀
慶大の学生時代、大先輩の茅野儀太郎先生や植松七九郎先生のけいがいに接したのは感激であった。

山田 讓(43回) 上 講 訪
時代の夢のような思い出は、今や悲しくも半世紀前の神話になってしまった。

唐澤 道明(48回) 箕輪町
思い出は霜の校庭に素足で立つ朝札、湖畔の軍需工場の深夜勤、ダムや飛行場の土木作業、兵器廠の荷役など。

鈴木 敏(48回) 上 講 訪
在学は真に戦中戦後の混乱期。為に母校のよき伝統を十分に受け継ぎ得ず。然し現世の退廃に清陵を惟うことだ。

宮坂 勝郎(48回) 岡谷市
物心のつき始める頃戦中戦後と共に過した仲間は故郷と共に忘れられぬ存

列車通学。前車両は中学生、後は女子学生。中間デッキの辺は後年の男女共学を見越してか微妙な緩衝地帯だった。

小口 忠彦(36回) 下 講 訪 町
誇り高き母校。昭和三十年代頃母校を訪ねたら、校長がこの生徒は黙つて勉強すると言つた事も忘れられない。

佐久病院を拠点に記録映画「農民とともに」を三年がかりで完成。今度は中国の三峡ダムの映画を作ります。

日野 魁(37回) 講 訪 市
卒業して五九年。級友がなつかしく、会うことが楽しみだ。でももう会えない友も多くなり、感慨一しおである。

小松 庄亮(43回) 上 講 訪
故里を後に五十余年、古稀を迎えた今、霧ヶ峯の燃えるような鬼つづじの群落に限りない郷愁を感じます。

小林 啓一(47回) 下 講 訪
百年前、日清戦争に勝つて以来富国強兵におこり過ぎてアメリカに敗け、敗戦後は経済発展に五十年、再びおこりた。これが、私の水泳事始めです。

片岡 秀彦(47回) 上 講 訪
一年生の一学期末考査終了後、一週間、高浜プールにて水泳指導がありました。これが、私の水泳事始めです。

宮坂 和男(46回) 辰野町
会社人間をやめ念願の油絵書きの生活に入つて七年、女性像に専念。毎年十月五日十四日都美術館「一线展」出品

と庭球部の生活は私の健康増進に大変役立つた。幸にして今日でも元気です

緒にオールを握ろうと約束したが遂に

それが実現出来なくなつた。誠に残念。

「人間はどんなに賢くなつても、愚かさ

は無くならない」と。探せば、上質のユーモアの多い学校でした。

小口 神三(36回) 岡谷市
人生。残生暫し、余韻を惜しまん。

柳沢 武康(41回) 上 講 訪
疲弊と繁栄、戦争と平和、飢餓と飽食

、数世代を凝縮せしが如き我世代の

人生。残生暫し、余韻を惜しまん。

柳沢 武康(41回) 上 講 訪
疲弊と繁栄、戦争と平和、飢餓と飽食</

在今後も出来る限り旧交を温めたい。

林 徹 (49回) 下諏訪町

諏中最後の年に卒業。朴歯の下駄、白線帽、矯風会、諏訪湖マラソン…半世紀経つた今も、鮮明に思い出します。

有賀 英夫 (50回) 岡谷市

吉沢治作先生は私の人生最高の恩師。中学一年の一学期先生の一言で勉強嫌いが変身、歩む道が決ましたのでした。

坂本 健彦 (50回) 富士見町

青春再び還らず、黄昏て呻吟す。いつの日か帰らんと欲するも恩師・父母すでに亡く、望郷の念かこゝ根無し草。

小松 良樹 (51回) 上諏訪

万里の長城で校歌を歌うことなど五十年前には夢にも想いませんでした。五十年後は判りませんが、夫々の理想の花の咲くことを願っております。

鈴木 克彦 (51回) 上諏訪

男にとって青春は常に生々しい。還暦を過ぎたというのによく今が青春に直結していると錯覚。望郷の念も強い。

増澤 照久 (51回) 岡谷市

弁護士生活も、三六年、案外多忙な毎日です。幸に健康にも恵れ、あと一〇年位は、現役でと念願しています。

横川 端 (51回) 四賀

フレードサービスビジネスを起業して四半世期になります。「リストラ」も「価格破壊」もわがためにある日々です。

原田 瞳明 (52回) 富士見町

脱サラ十六年、諏訪人は経営に向かなといと嘆いていたが、バブル崩壊で堅実な諏訪人気質の有難さを実感、感謝。

伊藤 安幸 (56回) 上諏訪

青春の思い出多き母校、晴れて開校百

年の歴史を刻む。失う勿れ! 自治の精神と質実剛健の気風。母校よ永遠なれ。

高橋 健治 (56回) 下諏訪町

三月に東大を定年退官、現在東京薬大

生命科学部に勤務します。縁濃い故郷を思われる環境が素晴らしいです。

渕上 良子 (56回) 上諏訪

東京清陵会の会員は四千名を超えてい

る。上諏訪の街は人通りが少なくこんなに東京へ出て来てよいのかしら。

今井 省吾 (57回) 岡谷市

母校は百歳、我々は還暦。歳には負け

ずと年二回のゴルフ会や懇親会を催して益々意氣軒高に旧交を温めておりま

す。

今井 恒夫 (57回) 上諏訪

ひたひたと押し寄せる人生の黄昏も、執筆三昧で実感できない。言葉を代えれば開き直りといふことにしてしまうか。

高木 祥勝 (60回) 上諏訪

都庁で主に国際関係に従事。「心は駆け

る五大洲」の清陵精神で、世界を相手の都市外交に励んできました。

名取 将 (61回) 富士見町

この四年、暮しの中の輝きを見つめて

温故知新を地で行く旅をしている。ふ

と思ふ、人の心を思いやる大きさを。

浜宏幸 (57回) 清瀬

故郷といつたら父母・兄弟・学校そ

れに八ヶ岳・諏訪湖。それにもしても湖

林 雅美 (58回) 下諏訪町

例年の倍以上の実習生が校内にあふ

れ、不況の波教育現場にも。初志叶う

者一%なのに。若者受難いつまで続く。

後は好きな絵を描いてのんびりしたい。

青木 孝弘 (62回) 上諏訪

清陵出でから三十余年。平和で活力に

満ちた時代に活躍できた幸せを感じま

す。山紫水明の故郷がしきりに想われ

ます。眞冬も負も自然と恵みが充満中

です。諏訪の街が生きています。

今井 将隆 (60回) 岡谷市

富士と相模湾を見渡す葉山の丘の上の

湘南国際村センターに勤務。緑陰滞在

型の文化交流を目指す。おいで乞う。

五味 孝 (60回) 芽野市

ひたひたと押し寄せる人生の黄昏も、

執筆三昧で実感できない。言葉を代え

れば開き直りといふことにしてしまうか。

宮坂 元裕 (62回) 岡谷市

私は大学入試い加減時代にまぐれで

入った。今の大学入試は正確さに腐心

し、まぐれを排除しみんな同じ顔。

菊池 千明 (64回) 上諏訪

長野県人と言うだけで存在感がある自

分! もう忘れてよい東京生活三五年!

しかし、でも、「信濃の国」、「清

早川 次彦 (61回) 小瀬

五十歳を過ぎカヌーを覚え楽しんでい

る。広告の制作に携わっているが定年

後は好きな絵を描いてのんびりしたい。

中島 基貴 (65回) 岡谷市

酒を飲み、歌を歌い、人生を語り、夢

を語りあつたコンパが、清陵時代の熱

い思い出です。夢の実現に努力中です。

原 不二夫 (65回) 玉川

諏訪弁、信州弁の死滅をなんとか食い

止めようと必死です。しなの、すわが

いの、すわになつたらおしまいます。

河合 三彦 (66回) 水明

東京清陵会の会計監事を担当し、間も

無く二十年程になりますが、基金も多

めしいと同じ様に、老いる事と成熟す

る事も美しさと幸せを持つている。

生越 万理子 (66回) 上諏訪

興奮と戦いの時代であつた青春時代が

美しいと同じ様に、老いる事と成熟す

る事も美しさと幸せを持つている。

高橋 和雄 (66回) 下諏訪町

創立百年を単なる懐古趣味やアナクロ

にしてはなるまい。伝統は風化しつつ

ある。再生に向け現役の奮起を望む。

山本 正房 (67回) 宮川

旅を趣味とし、余暇に出た旅から帰る

とき、ふと通学時の上諏訪駅が目をよ

ぎる。忘れた日々の夢。心の旅路に。

三行短信

ました。五月、有賀峠の新緑の素晴しさに打たれ。故郷を実感いたしました。



母校への糸深めて

東京清陵会

「清陵女性の輪をもつと広げよう」と東京清陵会の第一回女性の集いが二月二十五日南青山会館に六十人の女子卒業生が集合して開かれ、母校の百周年を祝い、その伝統の中に育くまた「若い力」をさらに東京で結集しようと約束しあつた。ことしは男子校清陵に女生徒が入学してから四五年にもあたり、この会でも各世代からの幹事九人を選び、今後の組織づくりを強めしていくことになった。東京清陵会事務局の調べでは東京・関東地区では女子卒業生が三百人を超えている。

「結束を強めよ」

清陵女子が東京の地でバラバラに生きつどいは生越万里子さん(六六回生)の司会で、開会の辞は西村いづみさん(七七回生)。主催者あいさつに立った済上良子・清陵同窓会本部副会長が、「母校は百周年を迎えるが今や女生徒が四〇%を占める時代。このつどいは

ネットワーク連絡担当は次の通り

(敬称略)

▽済上良子(五六回生、昭島市中神町二二七七一四一一四二七。電話○

二三一一一一二〇一、電話○三・三四二五・四三・〇七七一)▽長田宏子(六二回生、横浜市緑区あざみ野三二二一一三〇六。電話○四五・九〇二・

八九四〇)▽生越万里子(六六回生、川口市西川口三一七一一二、電話○四

八・二五五・二九三三)▽三橋ひさ子(七回生、千葉市中央区道場南一一一

九一三、電話○四三・二三五・二〇

七三)▽宮坂淳子(七四回生、横浜市

六〇)▽一善(八回)、琴理

の男子児童はだらしない。男親の責任だ)三橋ひさ子さん(七一回生)の男性批判論も出て、来賓からの「清陵にも美人が多かつたのですね」の発言を吹き飛ばしていた。

会場ではアンケートもとり、「組織づくりには連絡幹事が必要」の提案で幹事の選出も行われた。

今年度東京清陵会総会の当番幹事、長田宏子さん(六二回生)からは「九月の総会にはぜひ出席を。女性の力で盛りあげてゆきたい」と呼びかけた。来賓では小平祐・東京清陵会会長、小松誠・寺島敏郎の両副会長、林尚孝同事務局長、小口禎三前会長が「華やかなる会」の幹事として選出された。

子供たちに明るい未来を

緑区藤が丘二二一四一二〇、電話○四五・九七一・二九〇三)▽西村いづみ(七七回生、目黒区東が丘二一三一一一二〇一、電話○三・三四二五・四三・〇七七一)▽茂木真理(八二回生、南足柄市関本一三六一三、電話○四五・七三・三四六二)▽相澤加奈子(八七回生、横浜市青葉区美しが丘一一一五四一B一一〇三、電話○一〇・一二六五)▽茂木真理(八二回生、南足柄市関本一三六一三、電話○四五・九〇三・四九六七)▽土屋理恵(九三回生、杉並区久我山四二二九一三三二六、電話○三・三三五五・一四

かなふん開氣の集いに同窓会への力強さを感じる」と述べて、今後のネットワークづくりに期待をかけた。しかし実際には、出席者からの発言は活発で「楽しみに参加したが、もっと早く開催して欲しかった」や「小学校の教諭だが、いまの男子児童はだらしない。男親の責任だ」など、意見が分かれていた。

現在、子供の教育環境は一見恵まれているよう見える。しかし実際には、受験地獄が低年齢層にまで及んでいる。二歳児からお受験の塾に通う母子、幼稚園生活と並行して進学塾や稽古事で週五日間びっしり詰まっている子もいる。将来確実に人口が減ると分かり、ずっと不況が続いているのに受験熱はまだ冷めていない。

今、子供にとっての自然環境は確かに不足しているが、これは大人の努力である程度は補えるかもしれない。都会に住んでいても、少し電車に乗り少しうけば、まだ木立や野原や川があり、山に登ることもできる。人間らしい生活は、受験技術からではなく、心の触れあいや自然の恩恵から生まれるのだと思う。子供のために明るい未来を願うならば、親や教師達はどんな時代にあっても子供に夢を持たせ、健やかに育てる責任がある。

ところで現実の社会は重苦しい暗雲が飛んできてバイキンマンをやつつけ、真っ青な空と明るい太陽を取り戻す。これは子ども達の大好きな「アンパンマン」の一シーンである。

現代の幼児向け絵本には数多くの優れた作品があり、子どもの心を引きつけている。幼児の劇遊びの内容も従来

交流を通じて仕事豊かに

矢島 弘子
(66回)

昭和三十八年、諏訪清陵高校を卒業して、早や三十年の歳月が過ぎました。振り返って見れば、東京学芸大学卒業後は、東京都の公立小学校の教諭となり、教師の仕事にやつと慣れた頃には、結婚、育児の仕事が加わって、仕事、仕事とひたすら忙しさに追われる毎日で、生活にゆとりが感じられるようになったのは、つい最近のことのようになります。

当時、女生徒は一学年に五・六人か七・八人で、私の学年は七名のみでした。女子は、二人又は三人ずつ、三つのクラスに配属されて、たくさんの男子生徒に囲まれて授業を受けていました。当時は、まだバンカラの風潮が盛んな時代でしたので、男子は黒のつめ襟の学生服を着て、白いズックカバンを肩から下げて、教室を移動するという毎日でしたが、女子も男子も和気あいあいで、違和感はありませんでした。しかし、当時から受験戦争は厳しく、部活などはしながらも皆、勉強一筋でした。特に女生徒は優秀な人が多く、私などは皆についていくだけでした。しかし、当時から受験戦争は精一杯でしたが、女子はよくまとまっていて、男子生徒のことや先生方のことなどおしゃべりしたりして、とても楽しかったことを覚えてています。

女子の体育は、当時は、夏はテニス、冬は卓球で、夏は中庭でテニスに夢中になっていたものです。部活では、私

男女の差打破って

金子 恵子 (77回生)

は放送部や新聞部が、女子が少なかっ
て、大した活動をして、今や時代
割近くも入学し、長が誕生したとの
イメージは消えつつながらも、女生徒
やかさを感じてい
ました。会には六
員のみの第一回同
年会の二月、東
京で卒業して
た。

は放送部や新聞部が、女子が少なかったとして、大した注目を浴びた。しかし、今ややや割近くも入学割長が誕生したため、メトジは消えながらも、女学生たちのやかさを感じて、今年の二月、員のみの第一回会議に出席しました。

なか 活動 時代 し、
聞部 との つづ
は六 同回 東生徒 てい

つたこともあります。しかし、はしませんで、も変わり、女子の学事、當時の清陸軍、昨年は女子の学事、當時の清陸軍の活躍に一種のあります。

遠慮した。育界の仕事をしていきたい。にも驚かされた。女性会出席し、が四後援会も思いでいる。今後も皆さんと一緒に育界の仕事をより興味をもつてもらおう。創立百周年が近づいていた。我が母校へりしたいために、遠慮した。

仕事の大変さ
がされました。
この交流を通して
豆かなものに、
思います。
周年を心か
校清陵のます
いと思います。

そして、今、
に少々弱気で仕
事に大変励まされ
ます。出席し女性会員
として、自分の仕
事としてゆくことが
ら祝うと同時に、お
ますの発展をお

仕事をする事で、人の仕事と別がない。徴だと田畠を耕す事だ。これがかくたびにあふれて、と思われる。

品など皆、私同様、心つけていらっしゃる。職業のかたが心つっています。

お墓まいりに行
るが、やるかたは、教
様に、男女の区
舍と自由に満ちて
多く、清陵の特

ねて皆で成ります。欠席な
ままで、奈
というより
ようです。
は預けてこ
りません。
のではなく
きるよう
ば、若い世
ではないか
んを連れて

された方のコメ
育児の真最中で
の方が若い世
私自身も子供
られましたが
子供が大きくな
、子連れでも
な開かれた集会
世代の参加がも
かと思います。(

のだと思いま
ントを拝見し
出席できな
がおり、今回
代に多かつた
次回は分か
なるまで待つ
気軽に参加で
いになるなら
つと望めるの
今回もお子さ
がいました(笑)

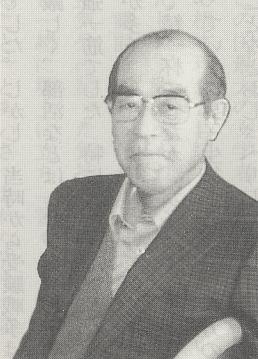
席されました。なつかしく、うれしいひと時でした。又、たくさんの女性

社会でこれまでやつてこれた基礎は、
清陵時代に築かれたもの、と感謝して

ました。



故堀川春彦兄を憶う



小口 三郎（四四回生）

首都圏在住の四四回生の会獅子会の会長で当会の常任理事であった堀川兄が、去る三月二十五日で吉希を迎える

ご家族に見守られ他界された。三月十

四日通夜、十五日告別式。農林水産省同

入省同期の沢辺守元農林次官が葬儀委

員長となられ、東京清陵会・農林省同

期会、第八高等学校同期会・四四回

の諏中同期生他多数の参列者のものと、

しめやかに執り行なわれた。喪主は長

男の伸一氏。友人として弔辞を捧げさ

せて頂いたが、過日小松誠副会長より、

堀川兄の追悼文を東京清陵会だよりに

とご依頼あり、筆を執らせて頂いた。

兄は、我々と共に昭和十三年四月に

諏中入学、日中戦争に続き太平洋戦争

に突入した時期に中学時代を過ごし、そ

の副幹事長として、活躍された。報国

團誌第四十一号に掲載された「自治の行方」は、戦後五十年を経た今日猶感

動的かつ今日的意義と斬新さを保つ。

兄は四年終了で第八高校学校の入試

にバスした。報国團の副幹事長として幹事長他委員達とその運営に寧日なき四年生の学期末に、受験勉強もろくに出来なかつた兄が、四修での受験に付き私に『親父に苦勞を掛けたくないから確実に受かりそうな学校を選び、受かれば行く』と語った。一年生以来常に一、二を競う秀才かつ努力家であつたから入つて当然ではあるが、親思

いのその言葉は私の心に焼き付いた。

兄はその後八高の二年間の高校生活の後東大法学部に進み、在学中に学徒出陣で海軍予備学生として海軍に籍を置き、恐らく乗る艦がなくなり陸戦隊に所属させられたのか、満州にも派遣された時期もあつた様だが、その後、本土決戦に備えて首都防衛の一環として館山の守備隊の小隊長として米軍上陸の迎撃作戦に備えたと聞く。



飛田先生の霧ヶ峰の植物標本諏訪へ

諏訪 彰（三八回）

飛田廣先生は、一九二五—四二（正一四—昭和一七）年に諏訪中学で博物科を担任され、霧ヶ峰・八ヶ岳や諏訪大社上社の森など、諏訪地方の植物の研究に精勤して、数々の新種も発見し、一九四一（昭和一六）年に名著『霧ヶ峰の植物』（本田正次氏と共に著、厚生閣）を出版された。その後、戦時中に、ご家庭の事情でご郷里の茨城県へ転任し、一九四七（昭和二二年）に永眠された。享年五一歳。

農林水産省の各部局の職務を所謂キヤリアーとして有能にこなし、構造改善局長を最後に退官されたが、私が東食アメリカに在勤中、食糧府の企画課長であった彼が米国農務省の招聘で米國へ赴き、講習会ノート、授業の指導案、

物を選別・整理するが、付置の「諏訪教育博物館」での展示は博物館部が担当する。寄贈された植物標本約八五〇

点の目録は既にほぼまとめられ、同

教育会の「自然研究記要」第三〇集（本年三月発行）に載っているが、展示・

公開は今秋以降になりそうである。

なお、一九三二（大正十二）年に諏

訪中学の生徒有志によつて創立され、牛山伝造・三澤勝衛・飛田廣などの

顧問の諸先生のご教導下で、二〇余年

にわたつて展開された「科学会」の活動は、全国でもまれなほど、全校に調査研究意欲をみなぎらせた。この際、

同会の活動を再開し、会員相互の親睦をはかると共に、理科教育の振興にも

じたことは、病いを直視し自分を偽らず又医師にも本当の事を言つて貰い、冷静な心で我々にも気持よく接してくれた。また自宅療養中は、志士会ゴルフ後の懇親会や獅子会新年会にも病を押して足を運ばれ、本当に友との触合いを大切にされた。兄にとつて断腸の親しまれた。四四回生の有志とゴルフの域を広められ、ゴルフ・開碁などに

いだつたのは、郷里にご高齢の母上

様を残し先立つ事であり、また二月九日、末弟の真人氏（四八回生）に先立つた事と推察、貰い泣きを禁じ得ない。

兄よ！ 唯安らかに憩い給え。

いていて、兄曰く『議論百出して雲上人となつたか』

△兄は農林水産省退官後、農林中金に中学卒業以来の同級会を一人で

丁度仕事の終つた午後九時頃会社に電話があり『十時以降なら体が空くから一の最上階で二、三杯のカクテルで話込み、午前様になつたのを思い出す。

当時日米間には緘維交渉その他経済摩擦が始まつた直後で、その頃の農産物以外の日米経済の諸問題が話題だつたが、現役時代の数少ない交友の一駒

であつた。窓外には眼下に霧雲が棚引で楽しまれたが、その後不帰の病に

取りつかれ、虎ノ門病院で闘病の生活

を送ることとなる。度々の見舞いで感

母校創立百周年記念訪中記

魏尚志氏の手で幕が取り除かれた。「記念日本諏訪清陵高校創立一百周年歌碑建立」と書かれた赤い横断幕の下に記念碑が姿を現した。高さ二米余の黄みがかった自然石で水蝕による孔が所々にあり、これまで見たこともない珍しいものであった。渡部清氏(五六回)の筆による第二校歌の冒頭の一節が赤い文字で刻まれていた。

石は二百キロ余離れている太行山から運ばれたもので、中国側の挨拶の中で「異国情緒を醸し出している」と云われた意味が石の姿を見て了解できた。小林俊光氏(五六回)から託された二本の幟旗「雖千万人吾往矣」がはためく下で、第二校歌が流れた。

二十一日全コースが合流し、六台のバスを連ね、万里の長城に向かう。日曜で渋滞の続く道をパトカーのお蔭でノンストップで走り、一三八人の一行は無事頂上に到着。抜けるような青空の下、汗をかいた肌に風が心地よい。念願の「経下邳圯橋懷張子房」の中の一節「椎秦博浪沙」が校歌の中に取り入れられたのではないかと私考しているが、博

川敷は茫茫たる砂州が続き、その中のほんの一部を利根川より水量の多い濁水が流れている。国道を右折すると緑麦の波が何処までも続いている。原陽

県に到着し、我々一行を歓迎する沿北上、黄河を渡る。川幅二キロ余の河

川敷は茫茫たる砂州が続き、その中のほんの一部を利根川より水量の多い濁水が流れている。国道を右折すると緑麦の波が何処までも続いている。原陽

県に到着し、我々一行を歓迎する沿

北上、黄河を渡る。川幅二キロ余の河

川敷は茫茫たる砂州が続き、その中のほんの一部を利根川より水量の多い濁水が流れている。国道を右折すると緑麦の波が何処までも続いている。原陽

県に到着し、我々一行を歓迎する沿

北上、黄河を渡る。川幅二キロ余の河

川敷は茫茫たる砂州が続き、その中のほんの一部を利根川より水量の多い濁水が流れている。国道を右折すると緑麦の波が何処までも続いている。原陽

県に到着し、我々一行を歓迎する沿

北上、黄河を渡る。川幅二キロ余の河

川敷は茫茫たる砂州が続き、その中のほんの一部を利根川より水量の多い濁水が流れている。国道を右折すると緑麦の波が何処までも続いている。原陽

県に到着し、我々一行を歓迎する沿



本部企画、多彩に

十一月一〇日(金)午後六時三〇分開演

清陵高創立百周年記念総会は十一月五日午前十一時から、小体育馆で、ま

た、記念祝賀会は午後一時から大体育馆で開催されるが、記念文化企画とし

てマルク・シャガール展、バンベルグ

交響楽団演奏会が諏訪、岡谷市内で開

らかれる。すでに前売券は発売を開始

しており、問い合わせは同窓会事務局(○

二六六・五八・〇三五六)まで。

第一校歌終章の「それサクセンの林

中に」のザクセン地方の南、店都バン

ベルグが世界に誇る、重厚な響きと豊

かなロマン——ドイツ音楽の真髓を表

現できるドイツでも名門のオーケストラ。一九四五年創立。今回もホルスト・

シュタイン指揮で日本公演は二年ぶり

入場料 大人八〇〇円、小人四〇〇円

締めくくられた。最年長の宮坂水穂さん(八七回)が同行した。SBCの映像は七月二日に一時間

(三二回)から最年少の小林孝次氏(九

回)を固く結ぶ校歌のもつ意義を再

紙数の関係で触れられなかつたが、

景山公園、天安門広場、打虎亭漢墓、

中岳廟、少林寺と少林寺拳法、中国最

古の白馬寺、閔林堂、竜門石窟、明の

十三陵、故宮博物館などに中国の歴史

の重さを痛感した。杜康酒などの美酒

と連日連夜の中国料理の味も忘れられ

ない。

SBCスタッフ三名、長野日報女性

(Aコース 林 尚孝記)

藤森昇氏(五二回)による漢詩で報告を締めくくる。

藤森 昇 締めくくられた。最年長の宮坂水穂さん(八七回)が同行した。SBCの映像は七月二日に一時間

(三二回)から最年少の小林孝次氏(九

回)を固く結ぶ校歌のもつ意義を再

紙数の関係で触れられなかつたが、

景山公園、天安門広場、打虎亭漢墓、

中岳廟、少林寺と少林寺拳法、中国最

古の白馬寺、閔林堂、竜門石窟、明の

十三陵、故宮博物館などに中国の歴史

の重さを痛感した。杜康酒などの美酒

と連日連夜の中国料理の味も忘れられ

ない。

藤森昇氏(五二回)による漢詩で報告を締めくくる。

藤森 昇 締めくくられた。最年長の宮坂水穂さん(八七回)が同行した。SBCの映像は七月二日に一時間

(三二回)から最年少の小林孝次氏(九

回)を固く結ぶ校歌のもつ意義を再

紙数の関係で触れられなかつたが、

景山公園、天安門広場、打虎亭漢墓、

中岳廟、少林寺と少林寺拳法、中国最

古の白馬寺、閔林堂、竜門石窟、明の

十三陵、故宮博物館などに中国の歴史

の重さを痛感した。杜康酒などの美酒

と連日連夜の中国料理の味も忘れられ

ない。

藤森昇氏(五二回)による漢詩で報告を締めくくる。

藤森 昇 締めくくられた。最年長の宮坂水穂さん(八七回)が同行した。SBCの映像は七月二日に一時間

(三二回)から最年少の小林孝次氏(九

回)を固く結ぶ校歌のもつ意義を再

紙数の関係で触れられなかつたが、

景山公園、天安門広場、打虎亭漢墓、

中岳廟、少林寺と少林寺拳法、中国最

古の白馬寺、閔林堂、竜門石窟、明の

十三陵、故宮博物館などに中国の歴史

の重さを痛感した。杜康酒などの美酒

と連日連夜の中国料理の味も忘れられ

ない。

藤森昇氏(五二回)による漢詩で報告を締めくくる。

藤森 昇 締めくくられた。最年長の宮坂水穂さん(八七回)が同行した。SBCの映像は七月二日に一時間

(三二回)から最年少の小林孝次氏(九

回)を固く結ぶ校歌のもつ意義を再

紙数の関係で触れられなかつたが、

景山公園、天安門広場、打虎亭漢墓、

中岳廟、少林寺と少林寺拳法、中国最

古の白馬寺、閔林堂、竜門石窟、明の

十三陵、故宮博物館などに中国の歴史

の重さを痛感した。杜康酒などの美酒

と連日連夜の中国料理の味も忘れられ

ない。

藤森昇氏(五二回)による漢詩で報告を締めくくる。

藤森 昇 締めくくられた。最年長の宮坂水穂さん(八七回)が同行した。SBCの映像は七月二日に一時間

(三二回)から最年少の小林孝次氏(九

回)を固く結ぶ校歌のもつ意義を再

紙数の関係で触れられなかつたが、

景山公園、天安門広場、打虎亭漢墓、

中岳廟、少林寺と少林寺拳法、中国最

古の白馬寺、閔林堂、竜門石窟、明の

十三陵、故宮博物館などに中国の歴史

の重さを痛感した。杜康酒などの美酒

と連日連夜の中国料理の味も忘れられ

ない。

藤森昇氏(五二回)による漢詩で報告を締めくくる。

藤森 昇 締めくくられた。最年長の宮坂水穂さん(八七回)が同行した。SBCの映像は七月二日に一時間

(三二回)から最年少の小林孝次氏(九

回)を固く結ぶ校歌のもつ意義を再

紙数の関係で触れられなかつたが、

第二十七回総会報告

昨年十月二十一日(金)に日本青年館で行われ、当番幹事である六十一回生が会場の準備と当日のお世話をさせていただいた。

当日は二百四十名にも達する盛会となり当番幹事より名称変更後の記念すべき第一回東京清陵会を楽しい会にしたい旨の挨拶で始まりた。その後物故された五十八名の方々に、厳かな鎮魂歌のもと默禱を捧げた。

続いて小平会長が当会を更に活発にして百周年を迎えると挨拶され、来賓の小菅重男同窓会会长は、百周年事業への力添えのお願いと、副会长に初めて女性の淵上良子さんが就任した報告と紹介がなされた。持田同窓会名誉会長からは学校主催の祝賀会の企画、現清陵高校生の文武両道の現状が話された。このあと、小平氏を議長に総会議事が進められ、林事務局長より、清陵百年史編纂、ビデオ制作などの一連の事業報告、収支決算報告がなされ承認され、併せて新年度の事業計画と予算案も賛成多数で承認された。

続いて懇親会に入り、宮坂伊兵衛氏(40回)よりご寄贈いただいた「真澄の鏡割り」が最年長の古山主一郎氏(19回)、片野満氏(56回)、NHKドラマ「かりん」の千晶役・細川直美さんらにより行われた。細川さんは総合司会の名取将氏(61回)、「NHKアナウンサー」の絶妙な問いかけに対し、撮影の思い出、清陵ポート部とのふれあい、落ち着いた諒訪の印象などを話された。そ



「東京清陵会ゴルフ同好会」について

河合 三彦 (66回生)

「東京清陵会ゴルフ同好会」は、平成二年に会員相互の親睦を計るために有志の発案により発足したもので、ゴルフ同好者の会は各学年毎に活発に行われていますが、先輩後輩との上下の関係の親睦会がなかつたので、名譽会長に山田六一前同窓会会长、会長には村上利雄徳東洋軒会長、副会长に

小平祐東京清陵会会长及び小松誠同副会長をお願いし、私の事務所を事務局にし、多数の皆様の賛同を得て毎年一回、千葉セントラルゴルフクラブで大会を行つてまいりました。いつもなごやかな雰囲気で楽しいゴルフ大会となつております。

平成七年五月末日現在の登録会員は一〇九名で、構成は三五回生の方から七七回生迄と幅広くなっています。

本年度より、前期に埼玉県の嵐山カントリークラブで開催してほしいという多数の会員の希望により、六月一日に三一名のエントリーにより同クラブにおいて、第六回大会が行われました。当日は、前日迄の大雪に打つて変つて、真夏を思わせるゴルフ日和になりました。村上大会会長の開会の挨拶の後、全員による記念写真を撮り元気なスタートしました。

日本オープンや関東オープンが開催されたこともある由緒あるクラブは、老松が多く、自然の起伏が美しいレベ

二人の女性会員にとつては、レディー・スティが無いというハンディにもめげず、非常に健闘されました。今回はアンダーハンディー方式を採用し、各自により自分のハンディキャップを申告していただき競技を行いました。

競技終了後、同クラブで打上げパーティ及び表彰式を行いました。宴たけなわになりますとなつかしい諒訪弁が飛び交つていつものような楽しいパーティーになりました。

成績は優勝細川欣一(六八回生)、準優勝小林史宜(六八回生)、第三位鮎沢久人(五七回生)という結果でした。

六八回生の両君は若者のパワーあるいはハンディキャップの勝利か、意見が大きいに分かれる結果となりました。

今回はいつもまして沢山の賞品のご寄付をいただき、全員に賞品をお渡しすることができます。紙上を借りてご寄付をいたいた方に厚くお礼を申し上げますと同時に今後も宜敷くお願い申し上げます。



なお「東京清陵会ゴルフ同好会」の名簿に登録されていない方は、下記宛、氏名、卒業年度、HCP、住所、電話番号を明記し、お知らせ下さい。
〒101 東京都千代田区三崎町
2-17-1 第2藤沢ビル301号
河合三彦公認会計士事務所
電話 03-3230-4447
FAX 03-3230-4448

元の会員登録表を含めて記入して下さい。

第5回迄の大会出席者数及び優勝者氏名

第1回	平成2年10月25日	15人	御子柴英夫	(65回生)
第2回	平成3年12月4日	29人	井益幸多	(57回生)
第3回	平成4年11月19日	20人	小野里雅司	(66回生)
第4回	平成5年11月18日	14人	丸茂弘	(66回生)
第5回	平成6年12月6日	23人	御子柴英夫	(65回生)
Best Gross 第3回大会 小野里多加司				(66回生)

計報

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。(敬称略)

氏名	年次	逝去年月日
小沢 修一	(59回)	1993. 4. 1
寺島 文雄	(33回)	1993. 8. 9
増澤 豊久	(37回)	1993. 9. 15
後町 末春	(39回)	1993. 9. 17
中村 満弥	(28回)	1993. 10.
武井七之助	(28回)	1994. 1. 24
下條 哲男	(51回)	1994. 2.
雨宮 文彦	(56回)	1994. 3. 24
宮坂光次郎	(35回)	1994. 3. 25
金子 伸	(48回)	1994. 4. 4
河西 義之	(49回)	1994. 4. 14
矢崎 和夫	(38回)	1994. 4. 15
藤森 重利	(39回)	1994. 4. 22
荻原 晃	(61回)	1994. 5. 4
矢島 俊男	(49回)	1994. 7. 18
伊藤 雅夫	(51回)	1994. 7. 20
小松福智郎	(33回)	1994. 7. 24
井内 勇	(21回)	1994. 8. 11
小松 正三	(33回)	1994. 8. 31
今井八三郎	(32回)	1994. 9. 6
畠 稔	(43回)	1994. 11. 25
武井 房幸	(38回)	1994. 12. 8
小池 幸	(33回)	1994. 12. 12
古屋 栄蔵	(29回)	1994. 12. 28
米谷 謙二	(55回)	1995. 2. 5
堀川 真人	(58回)	1995. 2. 9
木村 幹雄	(29回)	1995. 2. 21
堀川 春彦	(44回)	1995. 3. 12
木曾 昌人	(29回)	1995. 4. 16

(事務局に連絡が入った方)

- 二・云 東京清陵会女性の集い。午後二時より南青山会館。
マツモト東京ど七名参加。初めての会としては盛会で好評だった。
- 三・三 百年史編集委員会。於清陵会館。
- 三・三 百年史編集委員会。於清陵会館。
- 四・四 ビデオ「清水が丘にうたう」完成試写会。六時より於岩波映像。一六名出席。
- 四・四 事務打合會議。日本橋俱楽部。役員四名出席。
- 四・四 事務打合會議。日本橋俱楽部。総会の会場について他六名出席。
- 二・二 東京清陵会だより第六号編集會議。於聖路加タワービル。
- 二・二 東京清陵会だより第六号編集會議。於日本橋俱樂部。
- 二・二 東京清陵会だより第六号編集會議。於日本橋俱樂部。
- 二・二 東京清陵会だより第六号編集會議。於日本橋俱樂部。

平成6年度収支決算報告(案)

自平成6年4月1日 至平成7年3月31日 (単位:円)

収入の部		支出の部			
科目	予算額	決算額	科目	予算額	決算額
総会会費	1,540,000	1,729,000	総会費用	1,600,000	1,800,961
会員年会費	1,200,000	1,428,800	会議費	250,000	341,541
寄付金	50,000	50,000	諸旅費/通信費	20,000	54,450
受取利息	200,000	199,850	印刷費	600,000	406,372
幹事会費	40,000	38,000	事務雜費	100,000	120,416
名簿代	40,000	47,580	バソコン費	240,000	207,133
雑収入	0	3,000	預備費	300,000	531,394
前期繰越	16,039,236	16,039,236	次期繰越	50,000	0
合計	19,109,236	19,535,466	合計	15,849,236	16,073,199
			合計	19,109,236	19,535,466

創立百周年特別会計収支報告(案)

自平成4年4月1日 至平成7年3月31日¹⁾ (単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
収入(本部より)	15,000,000	制作委員会費用	70,275 ²⁾
預金利息	1,562	ビデオ制作前渡金	13,900,000 ³⁾
計	15,001,562	振込手数料	3,090
		次期繰越	1,028,197 ⁴⁾
		計	15,001,562

注 1) 収支報告書は累計にて計算

2) 主として会議費

3) 岩波映像販売㈱に支払

4) さくら銀行水道橋支店に預金

5) ビデオ代金予約は、平成7年3月31日現在 5,910,017円。

平成7年度収支予算(案)

自平成7年4月1日 至平成8年3月31日 (単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
総会会員年会費	1,750,000	総会会費	2,100,000
会員年会費	1,200,000	会議会費	300,000
寄付金	50,000	諸旅費	30,000
受取利息	200,000	印刷新聞費	700,000
幹事会費	40,000	事務雜費	100,000
名簿代	40,000	バソコン費	240,000
雑収入	0	預備費	550,000
前期繰越	16,073,199	次期繰越	50,000
合計	19,313,199	合計	15,193,199

- 総会の日時九月一三日
(水)、会場は虎ノ門パストラルに決定。
・七・三 中国博浪沙他への旅行実施。総参加者一五〇名。
・三・三 百年史編集委員会。於陵会館。東京からも多数参加。実り

- ・三・三 東京清陵会だより第六号編集会議。於電通社員クラブ。東京から幹事四名。本部常任幹事会。於清陵会館。百周年記念事業進捗状況他。東京から幹事四名。東京清陵会だより編集会議。於中央印刷。

【戦場の枯葉剤】刊行
中村梧郎氏(62回)の労作
フリードの写真家として活躍している中村梧郎氏(六二回)のグラフィックサポート「戦場の枯葉剤」が刊行された。

人々は勿論、米兵、韓国兵にも沢山の死者、被害者を出した。その傷痕は今でも尾を引く。中村氏はその被害をダイオキシンの危険を訴える精力的に取材し、「人類への犯罪」を告発すると同時に、我々に身の回りの